

「ふるさとと風景」の認識特性

秋田大学 学生員 ○吉田 史子

秋田大学 正 員 清水浩志郎

秋田大学 正 員 木村 一裕

1. はじめに

近年地方では都市化の進行にともない、自然のままの景観など、特有のアメニティ要素が減少している。このような現状から、昨年秋田県では農山漁村などを対象とした「景観条例」が施行された。現在景観保全に対する意識は社会的にも向上しており、アメニティ要素の減少については、むしろ都市住民の関心が高いともいえるため、本研究では「ふるさとと風景」に関する都市住民と地方住民を対象としたアンケート調査を行った。これにより、景観に求められる要素を明確にした上で、景観保全についての基礎資料を得ることを目的としている。

2. 研究の流れ

研究のフローチャートを図1に示す。本研究では「ふるさと風景」についての認識構造を把握するため、嗜好評価とSD評価の分析を行った。嗜好評価では満足度指標を求め、都市と地方の比較から景観の分類を行う。また、SD評価では因子分析を行い、イメージの特徴を把握する。さらに、これらの相関を明確にし、景観保全に対する提言を行う。

調査は、表1のような18対の形容詞で評価を行うものである。

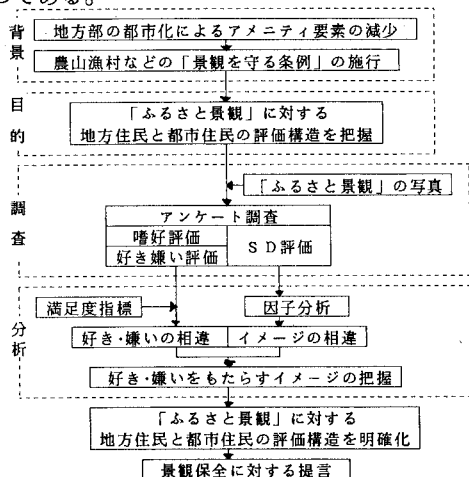


図1 研究のフローチャート

表1 評価尺度

N O	形容詞対	N O	形容詞対
嗜好	好き - 嫌い	P 8	自然にやさしい - やさしくない
P 1	機能的である - 機能的でない	P 9	調和している - 調和していない
P 2	このままでよい - 改良すべき	P 10	本物っぽい - つくりもののっぽい
P 3	広々とした - 窮屈な	P 11	親しみやすい - よそよそしい
P 4	歴史や文化を感じ - 歴史や文化を感じない	P 12	力強い - 弱い
P 5	整然とした - 雑然とした	P 13	緑の多い - 緑の少ない
P 6	昔ながらの - 変わりばえのない	P 14	にぎやかな - さびしい
P 7	時間がゆっくりしている - 時間がゆっくりしていない	P 15	あたたかい感じ - 冷たい感じ
		P 16	なつかしい - なつかしくない
		P 17	ほっとする - 落ちつかない

3. 調査概要

対象景観は、公園、農村集落、水辺などであり、秋田県内で撮影した18枚の写真を用いた（表2）。

表2 対象景観

NO	写真の種類	NO	写真の種類	NO	写真の種類
①	都市公園1	⑦	並木道1	⑬	農村風景1
②	都市公園2	⑧	並木道2	⑭	農村風景2
③	児童公園	⑨	野菜売場	⑮	かやぶき
④	自然公園1	⑩	農園	⑯	水辺1
⑤	自然公園2	⑪	定期市	⑰	水辺2
⑥	木造校舎	⑫	畦道	⑱	水辺3

被験者は東京都および周辺県在住者、秋田県在住者を対象にし、有効回収票は83票であった。年齢構成は39歳以下の「若年層」、40歳以上の「高年層」の割合が、都市、地方ともにほぼ半数となった。

4. 景観評価の分析

(1) 嗜好評価について

各写真に対して、下式で定義される満足度指標を求め、嗜好意識の分析を行った。

$$\text{満足度指標}(\%) = \frac{(\text{好きな人数} - \text{嫌いな人数})}{(\text{好きな人数} + \text{嫌いな人数})} \times 100$$

ここで満足度指標は、各々の景観に対し「どちらでもない」に反応した嗜好意識の低い人を除いて求められるものである。これにより、表3のように、地方・都市住民ともに高いもの、双方ともに低いもの、一方の評価が高いものに分類される。写真1は各分類の代表的な写真である。

地方での評価が高いものは「自然公園2」、都市での評価が高いものは「野菜売場」、都市・地方での評価が高いものとして「木造校舎」などがある。

表3 満足度指標の地域差

		地 方		
		低 い	高 い	
都 市	低 い	③児童公園	②都市公園 2	⑤自然公園 2
		⑤かやぶき		
市	高 い	⑥並木道 2 ⑨野菜売場 ⑪定期市 ⑫水辺 1	①都市公園 1 ⑥木造校舎 ⑬農村風景 ⑭水辺 2	④自然公園 1 ⑦並木道 ⑧畦道 ⑩農村風景 ⑮水辺 3



⑤自然公園 2



⑥木造校舎



⑨野菜売場



⑤かやぶき

写真1 代表的な対象景観

「かやぶき」は、満足度指標の値が都市・地方ともに0%となり、評価が極端に分かれた景観である。

(2) イメージ評価について

S D 評価については因子分析を行い、認識構造を検討した。ここでは対象景観として、都市と地方で差のみられた「自然公園2」(写真1)についての分析結果を示す(表4)。

表4 因子負荷量

	評価尺度	因子負荷量			評価尺度	因子負荷量	
		因子1	因子3			因子1	因子3
P1	機能的	0.13	0.30	P11	親しみ	0.78	0.12
P2	このまま	0.06	0.34	P12	力強い	0.55	0.12
P3	広々	0.59	0.44	P13	緑の多い	0.60	0.03
P4	歴史	0.32	0.64	P14	にぎやか	-0.08	0.09
P5	整然	0.40	0.59	P15	あたたか	0.33	0.14
P6	昔ながら	0.02	0.59	P16	なつかし	0.52	0.27
P7	時間	0.83	0.15	P17	ほっと	0.67	0.17
P8	自然	0.73	0.33	寄 与 率 (%) 変 動 割合 (%)		5.0	2.1
P9	調和	0.67	0.45			54.5	22.5
P10	本物	0.74	0.27			29.2	12.1

第1因子をみると「親しみ」「本物」の因子負荷量の値が高く「このままでよい」「昔ながら」に低い値がみられたため、整備に関する「改良-保全」軸と考えられる。第3因子は「歴史や文化」「昔ながら」「調和」が高いことから「文化-伝統」軸と解釈できる。この座標上に地域別に個体をプロットすると図2となる。ここでは都市の意識が「文化-伝統」軸に集結しているが、全体的な認識にばらつきがある。

そこで認識構造をより明確にするため嗜好とイメージの相関関係を年齢別に図3に表す。

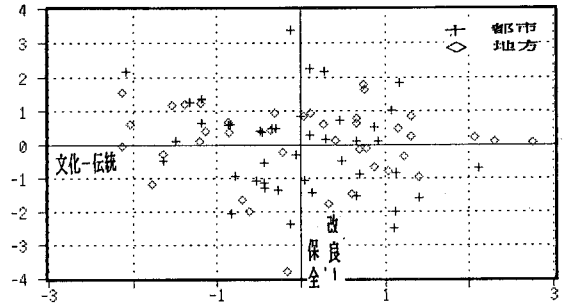


図2 個体プロット(⑤自然公園2)

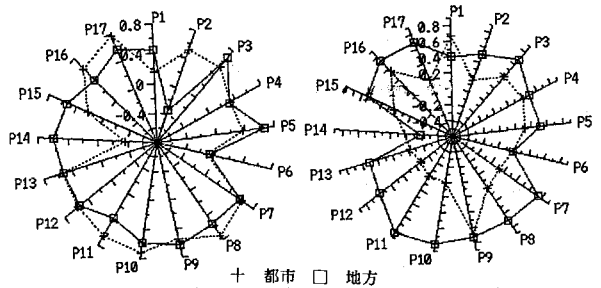


図3 嗜好と各形容詞の相関図

高年層では図中の形がほぼ等しく、地域差がみられないが、「なつかしい」「ほっとする」は都市住民の相関が高くなった。若年層では全体的に都市住民の相関が低い、そのなかでは「機能性」が都市住民の相関が高くなった。また都市・地方ともに「調和」の評価が高く、これは高年層でもほぼ同様であるため、「ふるさとの景観」整備のうえで重要な観点であると考えられる。

5. まとめと課題

「ふるさとの景観」に対する認識について、都市住民と地方住民でその構造に違いが認められた。景観の好ましさにについては、高年層では郷愁的なもの、若年層では「調和」と嗜好意識との相関が高いことが明らかになった。とくに都市住民の若年層では「機能的な」が高くなった。

したがって、今後の景観保全に関しては①精神性だけではなく機能性の向上や周囲の景観要素との調和を図ること、②年齢的・時代的な認識構造の変化に対応した景観整備をすることが必要と考えられる。

なお、アンケート調査では東京都立大学の秋山哲男先生、虎ノ門病院職員ほか、多くの皆様に御協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。